

聖書:テサロニケ人への手紙第一2章13~20節

説教:神のことばとして受け入れる

はじめに

パウロは第二回目の伝道旅行の途中、いまのギリシャの国の中にある港町テサロニケで福音を語ったとき、多くの信仰者が起こされ、その町にも教会が立てられていきました。ところが、ユダヤ人たちがこれをねたみパウロに激しい迫害を加えたことから、パウロはコリントと呼ばれる町にまで逃れなければなりません。パウロと一緒にだったシルワノとテモテは、テサロニケの近くに踏みとどまり、パウロと連絡を取りながら教会を助けます。そんなとき教会に深刻な問題が持ち上がってくる。その問題に対処するためにパウロがこの手紙を書いた。それがこの手紙の背景です。

前回は2章の前半部分のところで、パウロ自身が教会の問題について語る資格があるかどうか、そのことをまず確認しているのを見ました。今日はその続きで、今度はテサロニケ教会のことを確認していると読むことができます。それは二つあって、一つは教会はいまどういう所を歩んでいるのか、そして二つ目として教会はどこに向かって歩んでいるのか。その二点のことを語っています。このことは、いまの私たちの教会についても全く同じようにあてはまります。それはどんなことであつたのか、さっそく見ていきましょう。

1 パウロが語る福音

1) 旧約聖書からキリストを指し示す

13節を読みます。「こういうわけで、私たちもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたが、私たちから聞いた神のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実そのとおり神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いています。」

学者によって少し幅がありますが、パウロがテサロニケを訪問したのは、西暦五十年前後であろうと考えられています。当時はまだ新約聖書はありません。聖書と言えば旧約聖書のことを指すわけです。大きな巻物となったものが会堂や神殿の棚に大事に保管されていたから、普通の人は自由に読むことができません。聖書のみことばは誰かに語ってもらわなければならなかった。テサロニケの人たちもそうでした。パウロの口を通して初めて神のみことばを聞くことになりました。では、

パウロはどんなみことばを語ったのか。使徒の働き17章2、3節にこう書かれています。「パウロは、いつものように人々のところに入って行き、三回の安息日にわたって、聖書に基づいて彼らと論じ合った。そして、『キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならなかったのです。私あなたがたに宣べ伝えている、このイエスこそキリストです』と説明し、また論証した。」

これを読むと、パウロは二つのステップを踏んで説明していることがわかる。まず最初のステップ。旧約聖書にはキリスト、すなわち救い主のことが書かれている。まずそのことを説明する。それはいったいどこに書かれているのか。もちろんいろいろありますが、その中からひとつだけ挙げると第二サムエル記7章12節から14節が有名です。ある時神がダビデに語った救いの契約です。「あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。彼が不義を行ったときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。」

救い主は、ダビデの子として私たちのところへ来られ、罪ある者とされて父なる神によって懲らしめを受け、墓に葬られ先祖とともに眠りにつく。しかし彼は起こされて、キリストの王国を確立することになる。これが旧約のメッセージでした。まずそのことが一つ目のステップです。

2) キリストはイエスである

そこで次に問題になるのは、そのキリストとはいったい誰のことか、ということになる。ユダヤ人たちはキリストはまだ来ていないと言っているけれど、実はもう来られたのだ。エルサレムのゴルゴダの丘に立てられた十字架におかかりになり、そこで死に墓に葬られたけれど三日目に死からよみがえられた方、そのイエスと呼ばれるお方こそ旧約聖書で示されていたキリスト、救い主である。このようにパウロは二つのステップを踏んで説明します。

3) 神のことばとして受け入れる

テサロニケの人々は、これを人間のことばとしてではなく、事実そのとおり神のことばとして受け入れました。なぜ受け入れたのでしょうか。パウロは、人々の心をぐいぐいと引きつけるすばらしいカリスマ説教家であったのか。いいえ。「パウロは弱々しく、話は大したことはない。」そういう人たちもいたくらいです。

使徒の働きを読むとわかりますが、彼はどこに行ってもいつも自分がどのようにして救われたのか証しています。テサロニケでも彼は語ったはずで、ダマスコに向かう途上、まぶしい光に照らされて地に倒れ、目が見えなくなった時「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」と語る主の声を聞いた時、神によって自分の心を調べられて、罪を示された。その時初めて旧約に記されているキリストこそ、十字架で死に、三日目によみがえられたイエスであることを知った。そんな自分の救いの証しをテサロニケの人々に語りました。それを聞いた人たちは、単なるパウロの経験としてではなく、これこそ神のことばであると信じて受け入れ、信仰に導かれていった。考えてみれば不思議なことです。何かよほどご利益があると思ったので信じたのか。世の人たちはそんなふうを考えるかも知れません。

2 教会

1) ユダヤの諸教会に倣う

話は変わりますが、先日私の所にクリスチャン関係の団体を名乗るところから経営セミナーの案内が来ました。タイトルを見ると、「天が味方する企業経営、神様に約束された祝福の人生を生きる。」とあります。チラシには、クリスチャン経営者は右肩上がりの成長ができる、と書いてある。それを見て私は考え込みました。というのは、クリスチャンになったから必ずしも右肩上がりになるわけではないと知っているからです。むしろ苦しみ連続と言ったほうがふさわしいかもしれない。

テサロニケ教会もそうでした。14節。「兄弟たち。あなたがたはユダヤの、キリスト・イエスにある神の諸教会に倣う者となりました。彼らがユダヤ人たちに苦しめられたように、あなたがたも自分の同胞に苦しめられたからです。」

ユダヤのキリスト・イエスにある諸教会は、テサロニケの人々から見ればまぶしいほどの大先輩の教会で、それに比べたらこちらはよちよち歩きの子どもに過ぎない。そんなふうにしかなかった。ところがパウロに言わせれば決してそう

ではない。あなたがたは、ユダヤの教会と肩を並べられるほどのところにいるのだ。なぜなら、あなたがたはユダヤの教会と同じように同胞によって苦しめられているからだ。それが今の状態なのだと言います。

2) 苦難にあうようになる (3章4節)

テサロニケ教会はギリシャ人もいたし、ユダヤ人もいました。ユダヤ人は同胞のユダヤ人から迫害を受け、ギリシャ人はクリスチャンであることを理由に差別されたり、仕事を奪われ、地域の人々からのけ者にされていく、そのような迫害を受けます。こうなることはあらかじめわからなかったのか。いいえ、わかっていた。3章4節にこう書いてあります。「あなたがたのところに行ったとき、私たちは前もって、苦難にあうようになると言っておいただけですが、あなたがたが知っているとおりに、それは事実となりました。」

冒頭で、パウロは教会のことで二つのことを確認しようとしていると言いました。その一つ目がこれです。教会はどこを歩んでいるのか。いま、あなたがたは苦しみの中を歩んでいる。それが今のあなたがたの状態です。そうなることはあらかじめ聞いていました。テサロニケの人たちはそれを覚悟の上で信じたのです。この世の御利益のために信じたのではない。苦しみにあうことがわかっているのに、なぜ信じ続けるのか。世の人たちにはますます不思議に見えてその理由を知りたいと思うはずで、皆さんも同じでしょう。

3) 主の再臨のときを目指す

そこで19、20節を読みます。「私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのは、いったいどれでしょうか。あなたがたではありませんか。あなたがたこそ私たちの栄光であり、喜びなのです。」

もし目の前のことだけを見て、この世の幸福だけを追い求めるのであれば、教会に来ても答えはないでしょう。先ほど紹介したセミナーに行っても右肩上がりの経営者を目指したほうが近道かも知れません。でも私たちは違うところを見ています。主イエスの再び来られるとき。それが教会の目指すゴールだと言うのです。冒頭に挙げました、教会について確認している二つ目のこと。教会はどこに向かっているのか。その答えがこれです。

3 キリストの歩まれた道

そうは言っても、もっと苦しみにあわない生き方はないのかと問う方もいるでしょう。もちろん、できるなら苦しみが無い方がよいと私も思う。でもキリストはどうされたのでしょうか。この方は苦しみにあう必要のない方なのに、苦しみを進んでお受けになりました。最後は茨に冠をかぶせられ、その額からは血が流れました。なぜそうされたのでしょうか。私たち、罪ある者の友となるためでした。キリストがそのようにして苦しんでくださったので、私たちは救われました。

そんな私たちは今度はキリストに従って歩むことになります。キリストに従うようにして苦しみに会うことになります。苦しみに意味があるなどとは誰も考えません。自分の苦しみがだれかの役に立つと全く思えないでしょう。第一コリント12章26節に「一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しむ」とあります。自分ひとりが苦しみを味わっているように思っていますが、その一人の苦しみはそこで終わらないというのです。ひとり一人を結びつけていくことになる。そして20節に「あなたがた」とあるように、ともに喜びをいただく。今の苦しみが、多くの人と一緒にいただく栄光と喜びに変えられていく。そう言っている。キリストの苦しみがあつたからこそ私たちは神に結びつくことができたように、今度は私たちの苦しみがほかの人と結びつくために用いられ、ともに喜びをいただくことになる。私たちはそこに向かって歩んでいる。それが教会です。

そのような不思議な救いの道を備えてくださった主の御名をあがめます。